

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 22 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370344

研究課題名(和文) アメリカン・ルネサンスと日本開国を繋ぐ19世紀アメリカ言説の考察

研究課題名(英文) A Study on the Nineteenth Century American Discourse Shared in American Renaissance and Opening of Japan

研究代表者

中西 佳世子 (NAKANISHI, Kayoko)

京都産業大学・文化学部・准教授

研究者番号：10524514

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、アメリカン・ルネサンスと日本開国の共時性に注目して両者に共有される19世紀アメリカの言説を調査した。ナサニエル・ホーソーンと彼に『日本遠征記』編纂を打診したペリー提督の接点に関する研究はほとんどなされてこなかった。本調査では、ホーソーンと海軍との関わりと、ペリーの文学的素養の伝記的背景を明らかにした。そして楽団や艦上劇を日本開国の文化的兵器と位置付けたペリーの戦略の背景に、両者に共有される海軍言説と文学的想像力が反映されていることを考察した。研究成果を4回の研究発表、雑誌論文2件で公表。新たに獲得した科研費で研究課題を継続して行っていく。また関連の論集と翻訳の企画を進めている。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the nineteenth century American discourse shared in American Renaissance and the opening of Japan. Nathaniel Hawthorne and Matthew C. Perry had a certain connection through maritime affairs, to which researchers have paid little attention. This study clarified biographical facts of Hawthorne's social relationships with the U.S. Navy, and Perry's literary tastes acquired from his family environment. These backgrounds led to both sharing a naval discourse and literary imagination peculiar to maritime America. This affords a better understanding of Perry's endeavors of employing music and theatrical performances as a disciplinary device on board and "his chief cultural weapon" for opening Japan, later requesting Hawthorne to compile a record of the expedition. The results of this present study have been published in four academic conferences and two journal articles. An essay collection and translation projects are in progress.

研究分野：アメリカ文学

 キーワード：アメリカン・ルネサンス ナサニエル・ホーソーン 日本開国 マシュー・C・ペリー 19世紀アメリカ
言説 文学的想像力 海軍言説

1. 研究開始当初の背景

この研究の発端は、ホーソン作品に多用されている「プロヴィデンス」に注目してテキスト分析を行った研究者の博士論文に遡る。博士論文では、プロヴィデンスという概念の宗教的意味に加え、その語源が有する「予見する」という属性によって生み出されるアイロニーなどの文学技法が、ホーソン作品でどのように用いられているかを考察した。また「明白な使命」に見られる政治的イデオロギーとプロヴィデンスとの親和性にも注目し、それまであまり注目されることが無かった作家の作品創作と政治との関係性を前景化した。

そうした中で、ホーソンの代表作『緋文字』で言及される19世紀のプロヴィデンス言説の表象と、マシュー・C・ペリーの『日本遠征記』で言及されるプロヴィデンス言説の表象に類似性があることに関心を持つことになった。その関心から進めた研究が、平成23年に日本ナサニエル・ホーソン協会全国大会で発表した「浦賀の黒船がみた天空の緋文字 - ホーソンとペリーのプロヴィデンス」の論考となった。ペリーが日本開国の任務を終えた後、その帰路でリヴァプールのホーソンを訪ね、日本遠征記録の編纂を依頼したことはあまり知られていない。結局、ホーソンがそれを断ったこともあり、ウィリアム・E・グリフィスやサミュエル・E・モリソンによる古典的なペリーの伝記においても、その史実には簡単に触れているのみである。ロマンス作家としてのホーソンは、史実を題材にする際に、かなりのデフォルメを施して作品の創作を行っている。当時、『緋文字』でアメリカを代表する作家としての地位を築いていたとはいえ、なぜ海軍提督ペリーが、国家的大事業の公的記録となる『日本遠征記』の編纂をロマンス作家のホーソンに依頼したのかについての疑問が残る。ホーソン研究では、阿野文朗『ナサニエル・ホーソンを読む—歴史のモザイクに潜む「詩」と「真実」』(2008)、齋藤幸子『ペリーの『日本遠征記』とホーソンの東洋憧憬—「骨董品の収集品」に秘められた東洋』(2005)などがこの点に触れているが、付加的な言及に留まっている。

こうした問題意識を出発点とし、ペリーとホーソンに共有されるアメリカ言説にその手掛かりをもとめて考察を行った論考が前述の「浦賀が見た天空の緋文字」の発表である。その論文は平成24年に『アメリカ研究』第46号に掲載され、さらに京都岩倉実相院で発見されたペリー来航と彗星を関連付ける資料と新たな考察を加えたものが、論集『アメリカン・ルネサンス—批評の新生』(2013)に収録された。

2. 研究の目的

本研究の背景となった考察は前述のように、主にホーソンの『緋文字』とペリーの『日本遠征記』を主な対象としたものであった。本研究はさらに対象を広げ、そのテーマを「アメリカン・ルネサンスと日本開国を結ぶ19世紀の言説の考察」とするものである。日本遠征は「明白な運命」のスローガンのもとで行われた拡大主義の延長線に存在する国家的事業であり、捕鯨基地の確保という実質的な目的の背後には19世紀の新生アメリカの国家的言説が存在した。一方、アメリカン・ルネサンスを代表する作家ホーソンの作品では、当時のナショナリズムのあり方が重要なテーマのひとつとなっている。こうした観点からホーソンとペリーの接点を調査し、アメリカン・ルネサンスと日本開国を結ぶ19世紀の言説考察を試みるのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究では(1)ホーソンに『日本遠征記』の編纂を打診したペリーの文学的素養、(2)ホーソンと海軍とのかかわり、(3)ペリーと日本各地での接点、という3つの面からの調査を行い、海軍提督とアメリカを代表する作家に共有されていた言説と文学的想像力との接点、ならびにその言説が日本開国の性質に及ぼした影響について考察した。次に具体的な調査の経緯を説明する。

(1)ホーソンに『日本遠征記』の編纂を打診したマシュー・C・ペリーの文学的素養についての調査

平成26年にニューヨークのブルックリン海軍工廠博物館(Building 92)で調査し、開催されていたWWIIに関するツアーにも参加した。続いてワシントン海軍工廠において、National Museum of the U.S. Navyとその図書館で調査を行った。

ペリーの尽力により、1833年にブルックリン海軍工廠のライシールド(文化会館)と図書館が創設されたが、その蔵書に文学作品等も多く含まれており、アーヴィングやクーパーなどの文豪が図書館会員に加わっていたことがわかっている。調査では、ブルックリン海軍工廠のライシールドやペリーの住居跡地などを巡り、当時の海軍関係者の文化的な生活の様子を概観した。また併設の博物館では、日本開国に関する展示を閲覧するとともに関連資料を入手した。一方、WWIIに関するツアーでは、ペリーによる日本開国の背景にあった思想が、マッカーサーによる戦後日本支配の思想に受け継がれていることが窺えた。また地元の親子や退役軍人が休日にこうしたツアーに参加し、太平洋戦争の記憶を新にするアメリカの文化的側面を知ることができた。

ワシントン海軍工廠の博物館では、ペリーの文学への深い造詣が窺えるグリフィスの

古い論文が残されており、デジタルカメラでの撮影の許可を得て資料を入手した。

平成 27 年度はアナポリスとペリー一族の故郷のニューポートで調査を行った。アナポリスでは、Naval Academy の博物館と図書館を訪れ、博物館でペリー提督がブルックリン海軍工廠ライシーム図書館に寄付した書籍の目録を入手した。また図書館では、1841 年に作成されたブルックリン海軍工廠図書館蔵書カタログの手書き原稿を閲覧し、ホーソンが寄稿していた『民主党機関紙』がそのリストに記載されていることを確認した。一方ニューポートでは、18 世紀より運営されているレッドウッド図書館で調査を行い、ペリーの兄であるオリバー・H・ペリーが 1817 年に図書館に出資した際の証券の写し、その他の資料を入手した。これらの資料はニューポートにおけるペリー一族の文化的担い手としての位置を示しており、こうした環境がペリー提督の文学的素養の形成に大きく影響したことが窺えるものである。

また現地調査とは別に、ペリーの音楽や文学、演劇などへの関心が分かる伝記資料や論文の読み込みも行った。例えば、ウィリアム・エリオット・グリフィスの“A Typical American Naval Officer”(1885)からは、ペリーの文学的素養がイギリス貴族の血を受け継ぐ母親の影響を受けたものであり、ペリーがイギリス古典の筆写を行っていたという情報を得た。また、サミュエル・E・モリソンの“Commodore Perry’s Japan Expedition Press and Shipboard Theater”(1967)は、ペリーが日本遠征で行った艦上劇の目的や内容、その公演パンフレット作成に必要な印刷機を積荷に加えたことが記載されており、ペリーが文化的芸術的活動を艦上の統率に用いたことを説明するものである。さらに、ヴィクター・フェル・イエーリンの“Mrs. Belmonte, Matthew Perry, and the “Japanese Minstrels”(1996)は、ペリーが音楽や劇などを日本に開国を迫る際の「主な文化的兵器 (his chief cultural weapon)」と位置づけ、さまざまな演出を行ったことを論じており、本研究への大きな示唆を得た。

(2) ホーソンと海軍とのかかわりについての調査

この調査ではホーソン関連の伝記や手記などの文献の読み込みを行った。例えば、ホーソンの友人であり海軍士官のホレイショ・ブリッジの *Personal Recollections of Nathaniel Hawthorne* (1893)、ホーソンの長男ジュリアンによる *Nathaniel Hawthorne and His Wife: A Biography* (1885)、ホーソンの友人であるジェイムズ・フィールズの“*Our Whispering Gallery*”(1871)から、ホーソンと海軍との接点や船乗りの父を持つホーソンの海洋への関心の強さがわかる情報を得た。その他の伝記類やホーソンのノートブックから、

作家と海軍、海への関心が描かれているものを抽出し、こうした伝記的背景と創作との関係を考察した。またホーソンが編纂したホレイショ・ブリッジの『アフリカ巡航日誌』(1845) はペリーのアフリカ艦隊の記録であるが、これまであまり研究されてこなかった。本研究ではこの航海記を読み込み、ペリーとホーソンとの関係、ホーソンの海軍への関心などを考察した。また本書の翻訳も進めている。

(3) ペリーと日本各地での接点についての調査

ペリーの来航は日本各地に大きな影響を及ぼしたのはいままでの間でもないが、近年は政治的なインパクトだけでなく、民間レベルにおける文化的影響にも注目が成されるようになってきている。本研究でもそうした観点から、ペリーが訪れた日本各地における「黒船の受容」とでもいうべき現象を調査すべく、琉球博物館や首里城、函館の五稜郭、下田の開国博物館、霊仙寺、長楽寺、ハリス記念館(玉泉寺)、横浜開港資料館、小笠原の父島などを訪ねた。これらのペリーの上陸地には記念碑が建てられ、ペリー一行が行進した道や交渉したゆかりの場所には当時の史料が残されるとともに世俗的な色付けが成されて地元の観光化に寄与している。こうした文化的調査は、筆者の研究分野であるアメリカ文学・文化研究の手法と異なり、また文献の解読にもその方面の専門知識が必要なことから、各地で残された瓦版や、交渉の場となった寺などに残された資料の閲覧、あるいは現地の観光化された状況を窺うに留まった面は否めない。

しかし、例えば琉球王国史『球陽』では、琉球王国滅亡直前の彗星、異国船、天変地異などに関する記述が記載されていたり、下田では黒船の中でも赤い横縞のあるポーハタン号に「赤すじポーハタン」と愛称をつけていたり、また京都岩倉実相院日誌には、ホーソンも観測したドナチ彗星についての記録がアメリカ船の来航と関連づけられて記載されていたりと、日米交流の起点としてのペリー来航がもたらした文化的影響と、そこに反映されている 19 世紀アメリカの言説を考察する余地が多いことが分かった。また仙台市博物館では、ペリーが小笠原を日本の領土とする際の根拠とした仙台藩林子平による『三国通覧図説』のフランス語版の資料、1860 年に日米修好通条約の批准で派遣された仙台藩玉蟲左大夫の資料を閲覧した。ここには、2013 年に世界記憶遺産に登録された 17 世紀の慶長遣欧使節の資料もあり、開国期のアメリカとの接触到先立って、仙台では西洋への視点が開かれていたことを再認識した。一方、ペリーが統治を委ねた小笠原の欧米系住民の子孫の方々と 19 世紀に小笠原で遭難して救助された陸前高田の漁師の子孫の方々ととの交流が近年始まっている。

このように日本各地での調査により、歴史の表舞台であまり論じられなかった史実、また地域や民間レベルで生じた日米交流の原点への注目が、19世紀のアメリカ言説と日本開国との関係性を文化的側面から考察する本研究の新たな視点となり得るという示唆を得た。

4. 研究成果

[発表]

平成26年5月の日本ナサニエル・ホーソン全国大会で行った発表「『緋文字』における視線のポリティックス—指さすものと指さされるもの—」で本研究の発端となった、ホーソンの『緋文字』における流星の場面などで行われる登場人物達の指さし行為によって表象されるテーマを論じた。

平成26年12月の日本ナサニエル・ホーソン協会関西支部例会で「空と海を巡る転換期の文学的想像力—ホーソンと海軍、ペリー提督と文学」の発表を行った。ここでは、ペリーが幼少期にイギリスの名家出身の母親から古典文学の教育を受けていたこと、そして、船乗りの家に生まれたホーソンが、当時発展しつつあった海軍へ強い関心を抱いていたことに言及し、日本開国を実現した時の海軍提督と、『緋文字』でその名を不動にした作家が、19世紀アメリカの思潮を共有していたことの蓋然性を明らかにした。

平成27年7月にコーディネートしたアメリカ文学会関西支部例会のシンポジウムではホーソン作品の群集をテーマにした。筆者は日本遠征とほぼ同時期に創作されたホーソンの『七破風の屋敷』(1851)に描かれる群集と作家との距離を論じ、アメリカン・デモクラシーに対するホーソンの期待と懸念について考察した。

平成28年5月のナサニエル・ホーソン協会全国大会で、これまでの調査成果の集大成として、「海洋国家アメリカの文学的想像力—海軍のディスクールとアンテベラムの作家達」と冠するシンポジウムをコーディネートした。このシンポジウムでは「洋上の読書共同体」「海軍言説」という概念を軸にした。特に筆者は、ペリーのアフリカ艦隊記録であるブリッジの『アフリカ巡航記』を編纂したホーソンの手法、そして、日本遠征における艦隊の規律維持に艦上劇を取り入れたペリーの文学的素養を論じ、両者に共有される海軍の言説と文学的想像力を検証した。またアーヴィング、クーパー、メルヴィルと海軍の関係性を論じたパネラーとの議論を通して、ホーソンをはじめとするアンテベラムの作家と海軍の関係性を包括的、多角的に論じる視座を得ることができた。結果としてより、広範な視点から本科研費の課題「アメリカン・ルネサンスと日本海国を繋ぐ19世紀アメリカ言説の考察」を深めることができた。

[論文]

平成28年3月発行の『フォーラム』第21号に、カイ・T・エリクソン著、村上直之 岩田強訳『あぶれピューリタン—逸脱の社会学』の書評論文を発表した。ホーソン、ペリーともに17世紀にアメリカに移住した古い家系の子孫である。ホーソンはピューリタンの末裔であり、ペリーはクウェカ の末裔であるが、両者に共有されるニュー・イングランドの風土、思想の原点がこの研究書には描かれており、本研究に有益な情報を得た。

平成29年3月発行の『京都産業大学論集人文科学系列』第50号に「『七破風の屋敷』の噂する「群集」 呪いの予言と幸運な結末」を発表した。これは前述のホーソンと群集のシンポジウムでの発表を論文にしたものである。

[今後の展開]

以上の成果を踏まえ、今後の展開として平成28年のシンポジウム内容での論集出版企画及び、ホーソン編纂の『アフリカ巡航日誌』の翻訳企画を進めている。また、本研究で得た大きな示唆のひとつが、開国に際して日本人が最初に接触したのはアメリカの「海軍」組織であり、ペリーが日本人観衆を強く意識して用意周到に演出を施した海軍文化の影響を受けたという認識である。新たに獲得した科研費にて、この問題意識をもとに本研究の発展と継続を図っていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

1. 中西佳世子「『七破風の屋敷』の噂する「群集」 呪いの予言と幸運な結末」『京都産業大学論集 人文科学系列』第50号 231-244 2017年 査読あり オープンアクセスあり DOIなし

2. 中西佳世子(書評論文)カイ・T・エリクソン著、村上直之 岩田強訳『あぶれピューリタン—逸脱の社会学』現代人文社 2014年『フォーラム』第21号 29-38 2016年 査読なし

[学会発表](計4件)

1. 中西佳世子 招待発表(司会・講師)シンポジウム全体テーマ「海洋国家アメリカの文学的想像力—海軍のディスクールとアンテベラムの作家達」中西佳世子、林以知郎、齋藤昇、真田満 個人発表テーマ「ホーソンとペリーが共有した海軍ディスクール—イマジネーションと現実の接点」日本ナサニエル・ホ

ーソーン協 第 35 回全国大会 同志社大学
室町キャンパス(京都府 京都市)2016年5
月28日

2. 中西佳世子 招待発表(司会・講師)シ
ンポジウム全体テーマ「ホーソーン・アフタ
ヌーン:ホーソーンの群集」、丹羽隆昭、澤
西祐典 個人発表テーマ「『七破風の屋敷』
の噂する「群集」—呪いの成就と呪いの解体
—」日本アメリカ文学会関西支部例会 龍谷
大学 大宮キャンパス(京都府 京都市)
2015年7月4日

3. 中西佳世子 発表「船と港と文学的想像
力 ホーソーンと海軍、ペリーと文学」
日本ナサニエル・ホーソーン協会 関西支部
例会 関西外国語大学中宮キャンパス(大阪
枚方市)2014年12月13日

4. 中西佳世子 発表「『緋文字』における
視線のポリティックス 指さすものと指さ
されるもの」日本ナサニエル・ホーソーン
協会全国大会 かでの 2・7 北海道立道民活
動センター(北海道 札幌市)2014年5月
23日

6. 研究組織

(1)研究代表者

中西 佳世子 (NAKANISHI, Kayoko)
京都産業大学・文化学部・准教授
研究者番号:10524514